

「生成 AI 時代」の英語教育

——国際英語論の視点から考える理論と実践——

English Education in “the Age of Generative AI”: A World Englishes View

塩澤 正*・杉山侑姫**

Tadashi Shiozawa and Yuki Sugiyama

はじめに

2022 年 11 月の ChatGPT の公開は衝撃的であった。ChatGPT の登場によって、自由かつ創造的に AI と対話できる時代が想像以上に早く訪れたからだ。今後もこのような大規模言語モデルを基にした新しい生成 AI が多数登場し、携帯電話やコンピュータを用いて、さらに簡単に、人間の会話に近い形で生成 AI とやり取りできるようになるだろう。かつてのテープレコーダー、コンピュータ、そしてインターネットがそうであったように、言語学習者も教育者もこれを日常的に利用するようになるに違いない。

一方で、その便利さゆえにこの「超知能」については「神」か「悪魔」か、という議論が巻き起こった。だが、現在ではそのどちらにもなりうるという考え方が一般的ではないだろうか。つまり、人間が頭を使わずに「ずる」をするためにこれを使うか、あるいは学習の「補助」として使いこなすかが、その分かれ道となる。生成 AI を適切に利用すれば非常に有効な英語学習ツールとなることは間違いないことであり、この技術を効果的に活用するための支援を行うことが、今後の教員の重要な役割の一つとなってゆくはずだ（藤崎, 2024）。

「国際英語論」は英語の多様性を認知し、尊重することから始まったが、個人や教育との関係では、各学習者が「自分らしい英語 (My English)」を確立することを目標に置いている（塩澤, 2014, 2016；田中, 2016；吉川, 2017；吉川他, 2024）。その教育・学習過程で、今後生成 AI は多大な影響を及ぼし、リスクを伴う可能性がある。そこで、この小論ではま

* 人文学部教授—応用言語学・異文化間コミュニケーション

** 国際人間学研究科 博士前期課程 言語文化専攻

ず、生成 AI と教員、英語教育、そして国際英語論との関係について考えてみたい。生成 AI 利用の英語教育の落とし穴や国際英語論の立場からの教育上の留意点や課題についても議論する。その後、国際英語論の視点から見た生成 AI 利用の英語学習・教育について、具体的な活用例や留意点を紹介する。なお本稿では、現時点で生成 AI の代表格である ChatGPT を、包括的な意味での生成 AI や他の AI プログラムとほぼ同義で使用する。

1. 英語教育や英語教員は要らなくなるのか⁽¹⁾

「生成 AI の登場で英語教員や英語教育は要らなくなりますね」と笑顔で語る人たちがいる。ご自身の英語学習のどこかの段階で苦労した経験の持ち主で、日本の英語教育や英語教員に少なからず遺恨があるのかもしれない。そんなとき筆者らは「既存の英語教育のみを行う教員には辛い時代が来ました。英語が苦手な人、あるいは必要性を感じない人には救世主です。AI を使えば英文が簡単に作れて、自由に英語を扱えますから。ただ、英語教員や英語教育は要らなくなるというのは…」と議論を始めて「発想が単純過ぎる」ことに気づいてもらうように促す。

確かに生成 AI の登場で、基本的な通訳や翻訳は生成 AI に任せることもできるようになった。英語の小説や論文などは単語を調べながら苦労して読む必要もなくなりつつある。また、英語の授業内の活動の中心が、英語自体を学ぶことより、いかに生成 AI を上手に利用して、英語と付き合うか、ということにシフトしていくことも考えられる。英語が苦手な人は、おおいに生成 AI を使って英語の論文やメールを（日本語で）読み、英語でのプレゼンテーションを作成すれば目的は素早く達成でき、効率化にも役立つ。その意味で「日常的に英語を必要としない人」は、英語の学習自体が必要なくなるというのはあながち間違っていない。もともと、必要のない人まで小学校から大学レベルまで、ほぼ全員に英語を学習させるという、今までの日本の英語教育は大きな改革を迫られるはずだ。

しかし、それは、初・中級者までの話だ。日常的に瞬発的な英語での議論の必要性のある人や英語を自己表現の手段として使う人、あるいは言語表現の豊かさに価値を置く人などは、生成 AI が登場したところで、自分で英語を操り、意思を伝えたいと思うはずだ。生成 AI を利用すれば、英語に様々な感情を込めたり、微妙なニュアンスを表現したりすることさえもできるが、なぜ言語は自分で操作したいのだろうか。それは、突き詰めて言えば、言語は単なるコミュニケーションの手段ではないからだ。この点においては、英語の入門者であれ、上級者であれ違いはない。

外国語を学ぶことはその言語を使いコミュニケーションをとることが目的だが、それだけではないはずだ。基本的に思考は言語で行う。つまり、母語以外に新しい言語を身につけるということは、新しい発想や考え方を身につけるということと同義だ。これは人間の考え方

や価値観の幅が広がることを意味している。

自己表現の手段が言語なら、それはアイデンティティの一部であり、新しい言語で思考や表現ができるようになるということは、まさに自分に新しいアイデンティティが加わるということの意味する（塩澤, 2024-b; 杉山・塩澤, 2024; 吉川他, 2024）。一定のレベルで英語を使う人にとっては、英語自体が自分のアイデンティティの一部であり、それなしには自分の存在が考えられないのではないだろうか。英語により人間の付き合いの幅が広がり、キャリアチャンスが広がり、多様性を受け入れられるようになり、行動パターンや思考方法や価値観まで大きく変わっていく（塩澤, 2024-a）。そして、それは最終的には人生を豊かにする。これがまさに外国語は単なるコミュニケーションの手段ではないという意味だ。人生を豊かにすることは学校で学ぶ意義がある。全員が同じように学ぶ必要はないが、外国語教育や外国語を学ぶことは生成 AI があれば必要ない、というのは、外国語学習を単なる海外旅行での買い物や SNS でのコミュニケーション手段としてしかとらえていないということだろう。コミュニケーション手段以外にも、人間関係を広め、発想を豊かにし、普段とは異なる感情に触れ、価値観や行動パターンを変えるのが外国語学習だ。

また、異文化背景を持つ人の発想の尊重や理解の最も手っ取り早い手段は外国語学習である（大木, 2011; 東條, 2011; 塚原, 2011; Council of Europe, Modern Languages Division, Strasbourg, [1996, 1998, 2001], 2018）。それゆえ何世紀にもわたって隣国と戦争を繰り返してきた EU 加盟国では、高校卒業までに 3 つの外国語を学ぶことが義務づけられている。つまり、大げさではなく外国語学習は世界平和にも繋がっているのだ。ここにも生成 AI がどれほど発達しても、外国語を学ぶ意義の一つがある。

それだけではない。コミュニケーション手段としてもまだ生成 AI は完全に人間の代わりができるところまでは来っていない。共通言語を持たない話者と食事会やビジネスミーティングをする機会を持つとよく理解できる。このような場で、プロの通訳者を介しても、携帯の通訳アプリを使っても、ごちなく、もどかしくて、「自分で共通言語を操れたら会話がもう少しまともになるのに…」と思うに違いない。対面での会話の瞬時の言い換え、顔や状況を観察しながらの戦略的な会話、行間や沈黙を読んだ後の一言などは、相手の非言語的メッセージやその場の雰囲気、そしてメンバー構成などを総合的に勘案しながらでないと口から出てこない。これはまだまだ人間にしかできないコミュニケーション方略だろう。ただ、将来的には対面の会話や非言語さえも生成 AI がそれなりの判断をして、人間のコミュニケーションスタイルに極限まで近づくはずだ。

社会言語的能力や臨機応変に相手に合わせて調整するコミュニケーションスタイルも、今のところ AI は持ち合わせておらず、人間にしかできないものであろう。そして、それが相手への印象ひいては目的の達成具合にも影響を及ぼす。コミュニケーションは単なるメッセージを伝えるものではなく、それにより好印象を与えたり、自分の強い感情などを示したりするものでもある。誘いを断りながらも好印象を持たせることや、反対に、議論の後に二

度と話したくないと思わせてしまうこともある。この原因は、会話の内容というより話者の態度、つまり話し方（コミュニケーションストラテジーやコミュニケーションスタイル）の問題だ。これは今のところ人間にしか操ることのできないコミュニケーション要素であろう。こういうことを勘案すれば、「生成 AI が出てきたからもう英語の勉強も先生も要りませんよね」などと簡単には口にできない。

さらに、吉川ら（2024）が言うように、「一定の英語力を備えないまま、英語での発信・受信を生成 AI に全面的に依存しようとする姿勢は様々な不都合をもたらす。生成 AI が産出する英語文に誤謬や偏りがあっても気付くことができないだろうし、そもそも生成 AI を物理的に使用できない環境では、全くコミュニケーションが出来ない事が想定される。AI 時代といえども、自力でコミュニケーションのできる英語力を養うための英語教育の重要性はゆらぐことはない」。

英語に限らず人間の学びすべてに関しても、同じことが言える。効率性が重視される社会がさらに進めば人間は意味のある人生を生きるチャンスを奪われ、言語学習のような骨の折れる作業は生成 AI に任せるだろう。その意味で大げさかもしれないが、生成 AI の汎用は人間文明の危機に繋がるかもしれない（大下，2024）。ただし、教育は知識や技術の「トランスアクション」に意味があるのではなくて、それを獲得するまでの「インターアクション」に意味がある（Krzic, 2024），と考えれば話は変わってくる。この学習過程に知的作業が必要となり、知性や理性や感性の成長があり、それがひいては人間の文明を作る。そのように考えれば、外国語学習は AI によって要らなくなると教育者が言うことはできないだろう。

ただし、筆者らは言語学習における生成 AI の利用を否定しているわけではない。それどころか、教育者も学習者もこれを言語学習の強力なサポーターとして使えば、おおいに今後の言語学習に役立つと考えていることは強調しておきたい。そのためにも、自分自身の英語力を高め「自分らしい英語（My English）」の基盤をしっかりと持つことが重要であろう。

2. 生成 AI と国際英語論の関係

生成 AI と国際英語論の関係は「多様性」と「汎用性」という一見相反する言葉に集約される。国際英語論は世界の英語の多様性を尊重することによって、言語生活が豊かになると考える（Crystal, 1990, 1997; Kachru, 1976, 1982; Smith, 1976, 1987; 小宮, 2007; 塩澤, 2024-b; 塩澤他, 2016; 日野, 2008; 柴田, 2020; 本名, 2002, 2013; 吉川, 2017）。そして、言語の「正確さ」よりもコミュニケーション手段として、伝わるという意味での「汎用性」を重視する。生成 AI の登場によりこの2点はさらに重要な視点となっていく。以下、この関係を簡単に説明してみたい。

2.1 生成 AI の英語も多様な英語の一つ

生成 AI の作り出す英語もフィリピン英語やシンガポール英語などと並ぶ多様な英語の一つだ。その特徴としては、多くの場合、文法規則と文体規範に従って、正確だが形式的だ。理解しやすく、過度に複雑な単語や表現は避けられ、情報を効率的に伝えることに重点が置かれる傾向がある。広範かつ標準的な語彙と構文を使用する傾向があるので、指示しない限り言語に文化的な「かおり」や「味」は感じられない。また、感情的な俗語、慣用表現、カジュアル表現は基本的に使用しない。まさに優等生で無機質な英語だ。ただし、これは特別な指示をしない場合であって、話者としての生成 AI の立場、職業、社会的地位、気持ちなどを指定すれば、驚くほど社会言語的にも適切な発話をする。以下は ChatGPT（オムニ）に生成させた会話文だが、話し相手の一人を大学教員にするか、学生同士にするかによってフォーマリティーやトーンがこのように大きく変わってくる。

(1) 大学教員と学生の会話の場合

Professor: Hi, I noticed your recent submission seems highly polished, but I wanted to remind you that using ChatGPT to write your research paper is not acceptable.

Student: I wasn't aware that it wasn't allowed. Why is it a problem?

Professor: The main issue is that research papers are meant to reflect your own critical thinking, creativity, and understanding of the subject. Relying on AI-generated content can undermine that learning process.

Student: I see. So, it's about ensuring my work is original?

Professor: Exactly. Plus, using AI can lead to inaccurate or unverified information, and even issues with academic integrity. I encourage you to revise your paper with your own voice and analysis.

(2) 学生同士の会話の場合

Student 1: Hey, I noticed you're using ChatGPT to help write your research paper. You might want to be careful with that.

Student 2: Why? It's so convenient, and it helps me get things done faster.

Student 1: I get it, but the paper is supposed to show your own understanding and analysis. If you rely on ChatGPT too much, it could hurt your learning and even lead to plagiarism issues.

Student 2: I didn't think about that. What should I do instead?

Student 1: Try using ChatGPT for brainstorming or ideas, but make sure your final work is all your own thoughts. It'll be more rewarding in the end, and you'll avoid potential

academic problems.

(1)の大学教員と学生の会話の場合、submission, polished, undermine, academic integrity などアカデミックな語彙が多用されているが、(2)の学生同士の会話の場合は、口語的な語彙が多い。トーンもカジュアルだ。しかし、単なるカジュアルで日常的な会話ではなく、特に Student 1 は、plagiarism issues や using ChatGPT for brainstorming のような表現を使うことから、大学生として知的な話者であることがわかる。このように ChatGPT はこれらの要素をすべて勘案して、現実的で実にあるような会話を生成することは驚きに値する。

ただし、実際の人間の会話には、文法的な間違い、よどみ、言い直し、躊躇、脱線などが存在するのがごく自然だが、ChatGPT はそのような要素は特に指示しない限り生成しない。つまり、統語上も談話上も基本的には正確で必要最低限の内容の発話しか生成しないのだ。その意味ではオーセンティックな会話とはやや異なる。これも、生成 AI の英語がまた一つのバラエティーと言える要素でもある。

上の例でもわかるように、生成 AI の英語は、ユーザーが提供する指示、または会話履歴に適応する。相手に合わせるという意味で、適応性は抜群だ。利用者の専門知識のレベル、具体的な指示に基づいて、言語のスタイルと複雑さをほぼ自動的に調整する。ユーザーとのやり取りやフィードバックから学習し、時間の経過とともに言語の使用を徐々に改善し、ユーザーの好みに適応する。これを「コンテキスト感度」という。また、今のところ、生成 AI は、皮肉、文化的な言及、暗喩のある言葉を理解するのはあまり得意ではないようだ。しかし、すぐにかんりの諸相と高いレベルで人間と同じような会話ができるようになることは間違いない。

加えて、ChatGPT の例でいうと、情報が十分でないものに関しては、驚くほど平気で嘘をつく。実は、ChatGPT は正確な情報を伝えることに特化しておらず文脈に違和感のない確率の高い言葉を並べることによって文章を自ら創造的に作成し回答する（坂本，2024）。これは AI しかできないことだが、それゆえ真実でないことまで生成してしまう。これを「幻覚 (Hallucination)」というそうだが、英語以上に中身の信ぴょう性を疑う必要が常にあるということだ。図 1 は筆者の一人が、自分に関して検索

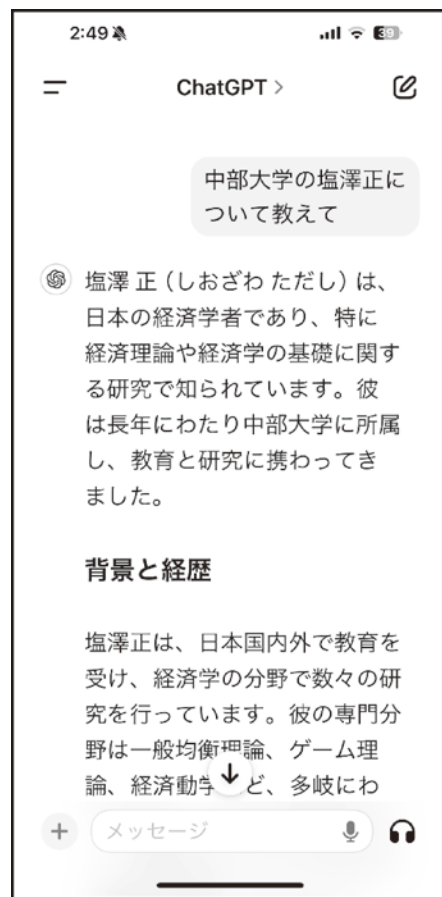


図 1 平気でうそをつく ChatGPT

(egosearching) したものだ。実際は応用言語学を専門にしているが、どういうわけか経済学の教授となっている。特に新しい情報でも、難しい検索でもないが、なぜ平気でこのような嘘をつくのかは理解に苦しむ。人間はこのような単純な嘘はつかないが、生成 AI は現時点では人間より平気で誤った情報を相手に提供する。しかし、これも生成 AI の英語のバラエティーととらえることもできる。

さらに、ChatGPT はユーザーのニーズに直接対応するコンテンツの提供を優先し過ぎるあまり、周囲の関連の薄い情報は提供しない傾向にある。人間の会話だと、「その関連で言う」と〜「ちなみに〜」「関係ないかもしれませんが〜」という枕詞の後に意外と重要情報があることが多いが、ChatGPT に限って言えばそのようなコミュニケーションスタイルはとらない。誰にでも効率よく、関連する情報を提供するという点で、汎用性の高い英語を提供するのだが、直接的、効率的過ぎて、「遊び」や「広がり」、それに言語的な「言い淀み」や「間違い」が少ないことが、人間の会話と異なる点かもしれない。だが、それは人間同士の会話では意外と必要不可欠な要素ではないだろうか。

こうやってみると、生成 AI の英語は言語のみならず、その内容までが、特定の文化的発想を背景とした人間の言葉とは異なり、一つの独特のバラエティーとしてとらえるべきであろう。

2.2 生成 AI の英語自体にもバラエティーがある

生成 AI の英語自体も世界の多様な英語と同様に一様ではない。生成 AI の言語モデルは、ネット上にある標準的なイギリス英語やアメリカ英語から様々な方言や地域変種を含む大規模なデータセットを基にしている。よって、生成 AI の作り出す英語も、それなりに多様なのだ。生成 AI は学習者の希望する英語変種に適応し、その英語を反映した発音、文法、語彙を認識してフィードバックを提供する。世界の様々な地域の学習者がそれぞれの状況に最も関連性の高い英語バージョンを学習できるようにサポートしてくれる。しかも、学習者にとって、多様な仮想英語話者とやり取りするという「直接体験」は、認知レベル以上に情意レベルで特定の英語のバラエティーを受け入れるきっかけを提供する。これは、イギリスやフィリピンに留学した学習者が、そこで話されるバラエティーに寛容になり、親近感を抱くことと似ている。

繰り返すが、生成 AI（ここでは ChatGPT）は指示しなければ、（日本で使用すれば）基本的には標準アメリカ英語で回答や返事をする。しかし、指示すれば日本人のなまりのある英語やインド英語で応答することも可能だ。また、特に指示しなくても、日本語のアクセントが強い英語で話しかけても問題なく返答する。インド英語でも、フィリピン英語でも同様だ。そう考えれば、受信レベルにおいては、ほぼ指示なしで自動的に世界の多様な英語に対応していると言えよう。

2.3 生成 AI が世界の多様な英語を疎外するリスク

実は、全く逆のことも言えそうだ。生成 AI は、標準アメリカ英語やイギリス英語をデフォルトにすることで英語の特定の規範を強化し、英語が世界的にどのように進化するかに影響を与える可能性がある（吉川他、2024）。これにより、ますます巨大英語変種（アメリカ英語とイギリス英語）の普及が促進され、より支配的な英語形式に偏りを示し、世界の多様な英語を疎外するリスクがある。この意味で、生成 AI は英語の多様性を促進すると同時に、一つの巨大英語変種をさらに特定の規範にしてしまい、本家はアメリカ英語やネイティブスピーカーの英語を規範とすべきである、といった「言語帝国主義」的な発想を強化するリスクを伴うことも理解しておく必要がある。

2.4 「正確性」は AI に任せ、学習者は「汎用性」に集中

しかし、それ以上に、国際英語論と生成 AI 利用の英語学習の関係で重要な点は、学習者は英語の汎用性に集中して、つまり意味に集中して言語活動を行うことが可能になるという点だ。まずは、学習者は内容を重視して英語を書き、正確さは生成 AI に検証してもらうことが簡単にできる。口頭でも会話の最中に随時、表現や文法の誤りを指摘してもらうことも可能だ。加えて、生成 AI は話者の文法的な誤りを含むアウトプットや日本語のアクセントはほとんど問題なく理解する。学習者は、その過程で生成 AI からの多量のインプットやインターアクションにより、流暢さは言うに及ばず、徐々に正確さやアクセントの自然さ（自分らしい英語らしさ）さえも養われ、自分の操る英語も総合的に上達する可能性がある。

今まで、日本人の英語力が貧弱だと指摘されてきた最も大きな要因は、学校で英語を「知識」として学ぶのだが、「言語使用」の機会が十分に与えられず、いざ使おうとするとなかなか伝わるだけのレベルの英語が口から出てこないというものであった。生成 AI の登場により、学習者は言語習得に欠かせない「言語活動」に気軽に勤しむことができ、言語習得がさらに促進される可能性がある。「意味」をやり取りすることで言語は習得されていくという考え方をとれば、言語習得の王道がさらに身近なものになったと言える。

このように国際英語論の最も大きな英語教育への貢献は、学習者は汎用性（意味が伝わること）に集中することにより、誤りや稚拙表現などを気にせず、気軽に英語を使用する手段を提供したというものである。そして、その言語使用の機会が英語習得を促進する可能性が高いということであろう。生成 AI の登場によりこれが今後さらに容易になると言えよう。

3. 国際英語論の観点から生成 AI は何が優れているのか

では、生成 AI は国際英語論の観点から言語学習ツールとして何が優れているのだろうか。以下、国際英語論と生成 AI 利用の英語学習や英語教育のメリットを考えてみたい。

3.1 言語使用の機会の提供

繰り返すが、通じることに重点を置く国際英語論的発想は、学習者に言語使用 (language use) の機会を提供する。基本的に言語習得に最も重要なのは「言語使用」の質と量だ。様々な言語習得理論があるが、その中心的なインプット仮説 (Krashen 1985)、アウトプット仮説 (Swain, 1993; Swain & Lapkin, 1995)、インターアクション仮説 (Gass, 1997; Long, 1996; Pica, 1994; 村野井, 2017)、気づき理論 (Schmidt, 1990)、自動化仮説 (Anderson, 1992; Swain & Lapkin, 1995)、エンゲージメント理論 (Reeve, 2018; 染谷, 2022) などは、すべて言語に触れてその「意味」を考え、自分と関連する話題で、有意味でエンゲージメントの高い言語活動をすることをキープポイントとして挙げている。しかし、今までの日本の英語教育では、文部科学省 (2016, 2018) が「オールイングリッシュ」で授業を展開することを推奨せざるを得ないほど、英語の授業で日本語での説明と学習者の日本語が飛び交い、教室内に英語の言語活動 (聴き、読むことも含む) が欠如していた。

だが、生成 AI は場所と時間と相手を選ばず、いとも簡単に、読む、書く、聴く、話すという言語活動を提供してくれる。しかも、それを一人ひとりの学習者のレベルや興味に合わせることも十分可能である。図 2 はある大学生が空き時間に AI にポケモンゲームでの必勝法を相談しているチャット画面である。このようにごく簡単に自分の興味のある分野で英語上級話者と話すような感覚で、英語で音声チャットや文字チャットができる。このチャットで驚くのは、この AI は会話の最後で人間のように相手への気遣いを見せている点である。これほど親切で

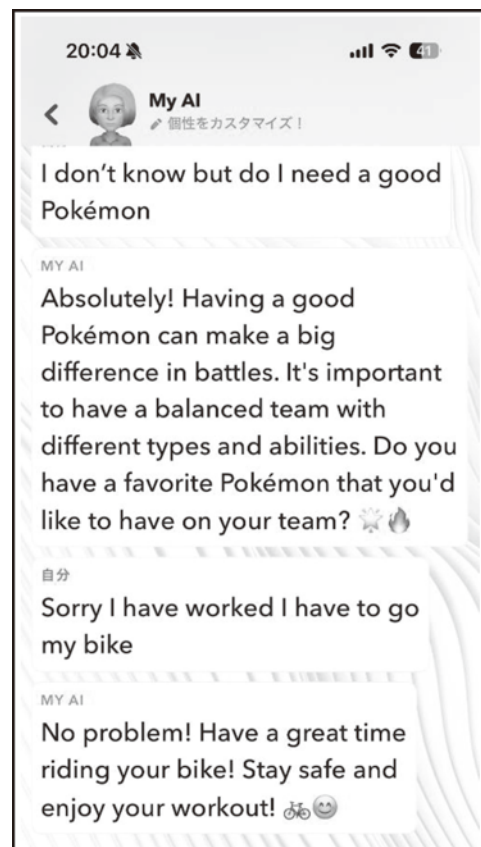


図 2 AI とポケモンについてチャット

友人思いの AI ならまた会話をしたいと思えるのではないだろうか。ちなみにこの AI に名前をつけて擬人化することも可能である。こうなると学習者は自分のことを理解してくれる友人が一人増えたかのような感覚になるかもしれない。しかも、それが常に学習者の都合に合わせ、気遣いもできる英語上級話者なのである。英語学習者にとってこれほど身近で理想的な英語話者はいない。

3.2 不安や緊張からの解放

間違えてもいい、伝わるのが最も重要だ、とする国際英語論の発想は、学習者を緊張や不安から解放し、気軽に言語を使う心理状態を醸成する。AI はこれを後押しする。AI は人間ではないので、繰り返しを何度要求しても、全く嫌がらない。返ってきた答えが気に入らない場合には、“Are you really sure? I don't think you're giving me enough information.”などと失礼な言い方をしても、全く嫌がらない。また、間違えても、事前に間違いを指摘してほしいと指示しない限り、AI は簡単にコミュニケーションの流れを止めるようなやり取りをしない。構造的に誤りの多い英語でも、意味不明な内容でも、AI はそれなりに解釈して何とか返答する。図2の例でも後半で、学生は「バイトがあるから自転車で帰る」と言いたいのだろうが、“*Sorry I have worked I have to go my bike”という発話は明らかに統語的に大きな問題がある。だが、AI はそれなりに理解し、適切に返信している。

AI との会話は対人での会話ではないため、緊張感が不足し、集中力が途切れやすいという欠点もある。しかし、対人コミュニケーションに伴う精神的なストレス、例えば聞き返すことへの恥ずかしさや、間違えることへの恐れがないため、リラックスして継続的に学習を進めることができる。AI を活用することで、ストレスを感じることなく、学習を持続させやすい環境を作ることができると言える。AI は相手の英語を「適当」に解釈してコミュニケーションを継続しようとするのだ。つまり、この生成 AI の「あいまいさへの寛容」というか、「適当さ」が、利用者に安心感と解放感を与えてくれる。これは、他人の評価や恥ずかしい思いをすることを極端に嫌う日本人には救世主ではないだろうか。

3.3 エンゲージメントを高める

英語教育における「エンゲージメント (Engagement)」とは、学習者が英語学習に「積極的に関与」し、学習プロセスに対して強い興味を感じる状態を指す。「心理的没入」と表現でき、興味や楽しさを感じながら気持ちを集中させ、注意を課題に向けて維持するような「熱中」する心理状態だ (染谷, 2022)。エンゲージメントが高いと、学習者は自発的に英語を学び、動機づけも高くなる可能性がある (Reeve, 2018)。エンゲージメントを高めるためには、学習者の興味やニーズに合わせた教材の提供、インタラクティブで参加型の授業、フィードバック

クの効果的な利用などが重要だろう。また、学習者が言語活動に熱中することで「自己効力感」を高めることにも繋がる。

ChatGPT の登場により学習者の興味やニーズに合わせた教材の提供、インタラクティブで参加型の授業（特にアウトプット活動）において、素早いフィードバックの効果的な利用などが可能となった。これはまさにエンゲージメントを高めるための重要な要素だ。ただし、この背景として、間違えてもいい、伝わること（汎用性）が最も重要だとする国際英語論の発想がない限り、そもそもエンゲージメントを高める言語活動に学習者が積極的に取り組めない。生成 AI 利用の言語活動には、国際英語論の発想が不可欠なのである。

3.4 有意味学習の提供

生成 AI は個人や目的に合わせて言語材料を提供したり、言語活動の相手になったりすることは得意分野だ。プロンプトに「あなたはアメリカのウェストバージニアの牧場に住む中学生で日本のアニメが好きです。ごく簡単な英語（CEFR A1）レベルで日本の中学 2 年生とゆっくり会話をしてください」などと英語や日本語で指示すれば、その指示通りに言語活動を展開する。つまり、学習者の興味や英語レベルに合わせて、その学習者にとって会話する意味や価値のあることをトピックとして、言語活動をすることが可能となる。まさに、これは学習者の興味やニーズに合わせて、有意味性（meaningful）と関連性の高い（relevant）言語活動を提供することができるということだ。

実は日本の英語教育で最近やっと意識されてきたのがこの「有意味学習」の重要性である。自分にとって興味のないこと、発話や読む意味が不明なものはまさに、学習のための学習であり、テストが終わればほとんど頭に残らない。いつ使うかもわからない物理の公式や一万語レベル以上の使用頻度の低い英語の語句などは、どれほど頭に詰め込もうとしても翌日には忘れていく。1 か月後にはまず覚えていない。ところが、海外で生活に必要な語句や病気で痛みを伝える表現などは、否応なしに記憶に残る。これは自分にとって意味のある学習だからだ。

話を英語の授業に戻すと、例えば健二と Julie になってロールプレイをしろというのでも、意味のある言語活動ではない。学習者は健二でも Julie でもないからだ。What day is it today? や Where do you live? などの言語活動も、答えを知っているなら聞く必要性がない。言語は欲しい情報を得るために、また自分の意図を伝えるために使い、それがその場の会話や人間関係に何らかの影響を及ぼすから意味があり、学びに繋がるのである。Ausubel (1968) や Krashen (1985) に言わせれば、すべての言語材料と言語活動は、学習者にとって「有意味」で「関連性の高い」もののみが言語習得を促す。国際英語論の観点から言えば、相手の英語力や英語話者の背景を勘案しながら、汎用性を強く意識して意味のあるやり取りをすることによってのみ、言語習得が促されると考えることができよう。その他は、単なる言語学

習「作業」で、言語習得や学習には繋がりづらいということは、経験的にも納得できる。

3.5 多様性の受け入れ

多様性を尊重することは国際英語論で最も重要な観点の一つだが、生成 AI も、基本的には多様な英語を受け入れるという姿勢に立っている。世界に向けて開発されているので、アメリカ英語でなければ理解できないというような生成 AI プログラムは自然淘汰されていく。必然的に多様な英語でも理解する。上記のように、日本人なまりの強い英語でも、AI が理解可能であると判断すればそれなりに対応する。また、イギリス英語を使ってほしいとプロンプトに入れば、少なくとも文字や文法大系に関しては、イギリスの標準英語に合わせてくれる。外円や拡大円での文化的知識がないと理解が難しい表現やその国の中で発達した英語表現、例えば「あいつは狸だ (He is sly like a racoon dog), Die, die must try (シンガポール英語で「絶対やってみるべき」の意), Your friend where? (シンガポール英語で Where is your friend? の意味)」のような表現さえも、理解し、翻訳もする。

ただ、現段階では、日本においてインド英語やフィリピン英語で話してほしいと生成 AI に伝えたと、「できる」と言いながら、音声で出力される英語はほとんどが基本的にはアメリカの標準英語だ。しかし、No, can't you talk like a British person? You have an American accent. などとしつこく要求すると、音声でもイギリス英語で返答する。比較的近い将来には、一言、指示すればインド人や中国人のようなアクセントで話し始めるだろう。

3.6 「汎用性」の基準を感覚的に理解する

自分の英語は通じるかどうかは、相手の英語のバラエティーや文化的な背景にもよるが、基本的に AI と会話が成り立てば、世界基準の英語として、受け入れられると理解できる。自分の英語が国際的にどれほど通じるかどうかは、実際に海外などで使ってみて、「これが通じないのか」「え？ こんな日本人英語で通じてしまった」といった経験値が必要で、それがなければ、経験の豊富な先生に通じるかどうか確認するしかない。ところが、生成 AI との会話では、わざわざ海外に行って現地の人と話さなくても、また先生に頭を下げて質問しなくても、AI が理解さえすれば適切な返答を返す。そうでなければ生成 AI は頓珍漢な返答を返すか、“Sorry, I didn't understand you.” などのように返答するはずだ。この返答により、少なくともその AI のその時点でのデータセットの基準で、学習者自身の英語の汎用性が十分にあるかどうかということが確認できる。これは、国際英語論で「どこまでのアクセントはダメで、どこまでならいいのだ」というよくある質問に、AI が「実体験」として暗示的に答えを提供してくれると言えよう。

3.7 コードスイッチング (Code-switching) やメディエーション (Mediation) が可能

最近注目されているトランスランゲージング (translanguaging) (García and Li, 2014) や複言語主義 (plurilingualism) (Council of Europe, Modern Languages Division, Strasbourg, [1996, 1998, 2001], 2018) の考え方では、「L1」や「L2」という言語の枠を取り払い、個人の中に個別の言語が複数存在するのではなく、すべての言語リソースが一つのシステムとして個人の中に存在していると考え。国際英語論では英語の多様性を尊重するが、複言語主義やトランスランゲージングでは、多様な言語のリソースが個人の中で互いに影響しあって、言語として必要に応じて英語や日本語を表出しているという発想をする。たとえ日本語だけで会話する場合でも、それは英語がその日本語に何らかの影響を与えていると考える。もっとわかりやすい場面は、2つの言語が同じ発話の中で使用されるような状況だ。例えば “It was such a *natsukashii* feeling.” や海外在住の家族の中での会話で、日本語と英語が交ざりあって飛び交うのもその例 (これ、日本から持ってきたんだ、you know?) だ。これは国際英語論という英語の多様性の尊重を、個人内の言語の多様性まで広げるという意味で非常に大胆な発想だ。多様性はコミュニケーションに幅と味を与え、人間のコミュニケーション生活を豊かにする (vs. 障害となりうる) という意味で、トランスランゲージングと国際英語論は同じ発想の延長線上にある。

さらに AI の利用はトランスランゲージングの発想に近いものがある。例えば ChatGPT (オムニ) との会話では、コードスイッチング (Code-switching) が可能だ。ChatGPT と英語で会話をしながら、すぐに思い浮かばない単語があれば日本語で質問することもできる。特に「日本語で話していいですか」などとたずねる必要もなく、突然英語から日本語に切り替えて質問しても、全く問題なく日本語で返してくる。そして、英語で話しかけるとまた瞬時に英語で何もなかったかのように、英語で会話を続けることが可能だ。AI にとっては、異なる言語の壁や多様な英語の壁はほとんどないと言ってもいい。こうなると、アメリカ英語とか母語話者とかアクセントとかは意味がなくなってくる。なぜなら、基本的に AI はそのすべてを何の切り返しや中断もなく、理解してくれるからだ。

また、生成 AI は会話の継続のために、まるで、もう一人の生成 AI が存在するかのように、人間と生成 AI の間に入って会話がスムーズに進むよう助けてくれる。これを「仲介・媒介 (mediation)」と言うが、3人以上の会話においてはこの仲介役ができる人間がいるかどうかで、会話の深さやスムーズさが各段に違う (Lantolf, 2010)。最近注目されている考え方だ。

下のダイアログはある学習者と ChatGPT との会話だが、学習者が「下敷き」という言葉が英語でわからなかったため、何と呼ばばいいのかと日本語で質問している。ChatGPT は日本語を用いながら答え、両者は何もなかったかのようにまた英語で会話を続ける。

学習者：I forgot to bring aum.... “shitajiki” from Japan. 英語で下敷きってなんていうの。

ChatGPT: 下敷きは一般的に英語で writing mat や desk pad と言います。

学習者：違うでしょ。あれはマットではないでしょ。

ChatGPT: すみません。underlay と言います。

学習者：Thank you. So, I forgot to bring an underlay. Where can I buy one?

ChatGPT: You can buy underlays at various stores in the US such as office supply stores like Staples or Office Depot.

学習者：Thank you.

しかし、ここに人間と異なる生成 AI の課題もある。確かに underlay や desk pad は紙の下に敷いてものを書きやすくするものだが、アクリルや塩化ビニルでできたデスクマットのことで、持ち歩き可能なあの日本の下敷きとは全く違う。あえて言えば plastic board for writing だ。だが、そんなものは英語圏では使わないので、英単語も存在しないのだ。会話の相手を取りあえず満足させようとする生成 AI の「悪い癖」で、存在しないものまでそれに近いものを教えてしまう。

生成 AI との付き合い方で重要なのは、提案されたものが「どうも違う」という認識ができる常識や英語力、それにそれを使いこなす「主体」（「主人」としてのリーダーシップだ。とりあえず、生成 AI が発したものを面倒だから、時間がないから、英語力がもともとないから使っている、などの理由でそのまま鵜呑みにしては、生成 AI に振り回されて、いつの間にかとんでもない間違いや剽窃を犯していることになりかねない。助けてもらっているようで、間違ったことを教えられたり、過ちを知らない間に犯して、後で避難されたり、尻ぬぐいをするようになることも自覚して使うことが大切だろう。図3は明らかに提供された情報が誤りだったので、筆者の一人が「適当なことを言うな」と ChatGPT を叱ったものである。一定の知識や英語力があって、AI を利用しないとこのようなとんでもない誤情報を信じてしまい、自分がそれを拡散してしまう可能性もある。

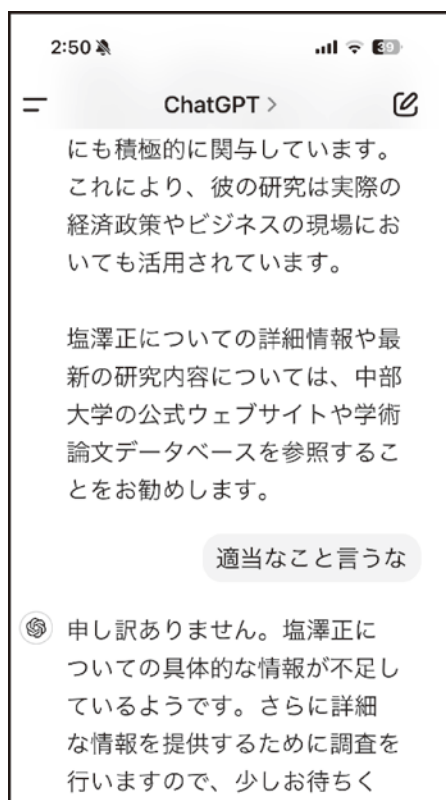


図3 主体性が問われる AI の利用

3.8 「自分らしい英語 (My English)」の向上

国際英語論の考え方を基盤にした英語教育では自分のアイデンティティを反映した「自分らしい英語 (My English)」の向上と確立を目的とする (塩澤他, 2016; 塩澤, 2020; 鈴木, 2011; 田中, 2016; 吉川, 2017; 吉川他, 2024)。自分の目指す英語モデルや規範は母語話者のそれではないとは考えない。これは、どの母語話者の英語をモデルとしても、日本人の発想と日本語という母語を通して産出される英語は、基本的にはニホン英語、あるいはその人特有の英語にしかならないという認識に基づいている。よって、英語学習の目標はあくまで現在の「自分の英語」をどれだけ高められるかということであり、英語学習をネイティブスピーカーに近づく過程であるとする中間言語理論 (Selinker, 1972; Swain, 1985, 1993; 村野井, 2017) とは考え方を異にする。つまり、今ある自分の英語から、可能な限り上達した自分の英語 (My current English → My better English → My best possible English) への変化こそが英語習得過程だと考える (塩澤, 2020)。国際英語論では、英語学習において、他人の英語と比較しない。比較するのは、自分の過去の英語である。

その意味において、生成 AI の生み出す英語はアメリカ英語やイギリス英語をデフォルトとしているが、決して利用者の英語にまでアメリカ英語やイギリス英語で話すことを強く求めてない。「自分らしい英語 (My English)」の確立を邪魔しない。それどころか、自分の今あるがままの英語を使つての言語体験は自己肯定感を強め、国際英語論で英語学習の目標とする「自分らしい英語 (My English)」の向上におおいに貢献してくれると言えるのではないだろうか。

3.9 個人に合わせた言語環境の提供

3.8 とも関連するが、AI は学習者の背景、目標、また、学習者の周辺で最もよく使用される英語の種類を反映した学習環境を提供できる。例えば、フィリピンの学習者は、フィリピンの英語や文化を反映したコンテンツと演習を受け取り、学習者の親しみやすい言語学習教材を利用できるようになる。また、その履歴機能は、個人の学習進捗状況と地域の文化や英語の違いを考慮した具体的なフィードバックを提供できる。これにより、学習者は、自分の言語環境に合わせて、発音、語彙、文法などの分野を向上させることができる。まさに「自分らしい英語 (My English)」の向上に、効率的に寄与してくれると言える。

3.10 自律学習の後押し

生成 AI はその使い方を覚えると、自分の興味とレベルに応じた多量のインプットを受け取り、AI と思う存分インターアクションが可能になる。つまり、その利用方法を身につけ

れば、導入レベルの学習者は別として、中級者、上級者にとっては夢のような学習環境が用意されていると言える。自律学習のハードルが下がり、少しの自己管理能力やメタ認知能力があれば、国際英語論でいう“My best possible English speaker”（塩澤，2020）に近づくための学習環境が手の中にある。AI が学習アドバイザーのような役割を果たし、AI の情報提示による足場掛け（scaffolding）によって学習者が自律的に学び（金丸，2024）、AI と言語活動ができるようになる。

4. 国際英語論の視点にたった AI 利用の言語活動例⁽²⁾

国際英語論の観点から AI を使ってどのような言語活動が考えられるだろうか。上記の優れた点を実践に当てはめて例で示すと、以下のような言語活動が考えられる。ただ、その具体的な実践例は AI の能力が上がるにつれて、加速度的に増えていくであろうから、ここでの具体例は現時点でのサンプルや考え方の基本に過ぎない。重要なのはその使い方の背景にある原理を押さえて、自分の教育環境に合わせて応用することだろう。

4.1 スピーキングでの活動例

(1) 流暢さ（fluency）の提供

AI を使えば、図 4 のように、簡単な日常会話をリアルタイムで行うことができる。携帯や PC にアプリをダウンロードし、“Can we talk in English?” と声をかけると、すぐに“Sure, we can talk in English! How can I help you today?”などと返事が来て、会話がスタートする。これにより、無料のオンライン英会話感覚で、流暢さの向上を目指したスピーキング練習が可能になる。流暢さを上げるべく、授業の課題としての AI との個人会話やウェブ上の検索作業を口頭で指示することもできよう。例えば、授業で扱ったトピックで、復習として AI との会話課題などを出すことも可能だ。個人学習として、空き時間に AI と英語で会話することなど、SNS を普段利用することと



図 4 映画についてのチャット

同じくらいごく日常的になるはずだ。移動中なら英語で道を聞く、目の前に見えたものについて質問すると、まるで歩く百科事典と会話しているような感覚になる。また、思いつかない表現などがあれば、日本語に切り替えて AI に質問しながら、辞書や翻訳ソフトなしに会話をスムーズに継続することができる。まるで、優秀な通訳者がその場にいるかのような感覚で生成 AI を利用できる。

(2) アクセントの汎用性の確認

繰り返すが国際英語論の観点からは、英語の正確さより通じるかどうかという汎用性が大切である。AI を使えば、自分の英語に実際のところ国際的な汎用性がどの程度あるかを確認することが可能となる。これは AI と会話している中で、AI が利用者の英語をきちんと理解するかどうかでわかる。例えば、narrow, vanilla, lawn mower, Mercedes, worm と warm の違い, raw と row の違い, BMV (Bureau of Motor Vehicles) など、なかなか日本人にはハードルの高い難しい音素を含む発音だが、AI がどれくらい理解するかを意識的に確認することによって、自分の発音の向上に役立てることができる。前述のように一般的にはこの汎用性の確認は、経験値が必要だが、AI はその経験を教室や家庭など場所と時間を問わず、可能にしてくれる。

(3) ロールプレイでレジスターやスタイルを設定

生成 AI に特定の役割を与えてロールプレイを行うことも効果的な学習方法である。例えば、AI に「観光ガイド」や「カフェの店員」などの役割を設定し、口頭練習を進めることができる。さらに、インド人や韓国人、入門者や上級話者など、AI のキャラクターを自由に設定することができるため、様々なアクセントや話者とのやり取りを練習することが可能である。AI に職業、社会的地位、出身地、年齢、状況などを提供することで、レジスターやスタイルまで適切な口頭練習が可能となる。場面に応じて会話の社会性、言語レベル、表現などを臨機応変に調整して会話の相手となるのは、AI でなければできない離れ業ではないだろうか。授業では、レジスターやスタイルの違いがはっきりわかるサンプルを、ディスプレイやタブレットを用いて学習者にその場で提示し、それを比較して議論することも可能だ。

(4) 適時のフィードバックで正確さに注目させる

不適切な文法、発音、表現などを、会話の中でその場で指摘するように AI に指示することで、正確さを意識した練習も行える。会話の中で適切なタイミングで文法や単語の誤りを指摘してもらい、学習者の発音や表現をより自然なものに改善することができる。ただ、会話の流れを止めてまですべての誤りを指摘するような設定はしない方がいい。国際英語論の観点から、また言語習得論の観点からも、意味のやり取りが言語習得を促進させると考えれ

ば、グローバルエラー（意味が阻害される間違い）のみを修正するような設定が推奨される。コミュニケーションが成立する程度の発音や文法であれば、あえて修正しないように設定することで、会話の流れを重視した練習が可能である。また、会話した内容はスクリプトとして保存されているため、会話後にスクリプトを見ながら、自分の弱点を確認することもできる。これを教室内でディスプレイを見せながら行えば、学習者の共通する誤りを指摘するようなことも可能だ。スクリプトを利用し、さらに様々な表現を互いに披露しあうという活動も考えられる。

（5）文化背景に依存する英語表現の確認

国際英語論的な観点から和製英語や文化的背景と密接に関係している日本的な発想から生まれる表現が、どの程度使えるのかなど AI に聞いてみることも面白い。例えば、rice balls ではなく、rice triangles はどうかとか、注文の場面で I'm tea.（本来は I'll have/take tea.）はダメかななどを質問できる。実際、筆者の一人がおにぎりの話を AI としたとき、ふとあれは balls ではないと発言すると、rice triangles はどうですかという提案があった。考えてみるとそちらの方が形はおにぎりに近い。教室では、教員のコンピュータを常に AI と会話が繋がっている状態にしておけば、日本的な英語表現や文法などに関して疑問が生じたときには、これを質問して、提示してもらうことも可能だ。ディスプレイや学習者のタブレットに送信できればクラス全体に簡単に共有できる。まるで、言語知識が豊富な超上級話者が教室内にアシスタントとして存在するようなものである。

4.2 リスニングでの活動例

（1）様々なリスニング教材の作成

AI に指示して、様々な形式（内容確認、間違い探し、要約、ディクテーション）や話題のリスニング教材を作ってもらうことが可能だ。TOEIC 形式や大学入学共通テスト形式で作成するなど、特定の形式や文法項目を条件としてセッティングすることもできる。AI は、旅行先や空港での会話、カフェでの注文など、実際のシチュエーションに基づいたリスニング練習をあっという間に生成する。このように、状況を設定するだけで、ごく短時間でそのような会話文を作成し、音声と文字で提供してくれるのが AI だ。同じような別の会話文を作成してほしいと言えば、すぐに別の会話を別の状況設定で作成する。また、学習者の英語レベルを指定し、聞き取り練習問題を作成することもできる。指示を適切に与えれば、数十秒で AI がリスニング問題を作成するので、教員が事前に準備しなくても、授業中に必要だと思われる聞き取り教材をその場で提供してもらうことが可能だ。

(2) 誤りの指摘, 説明

TOEIC や TOEFL のリスニング問題などで間違えたところをさらに詳しく解説してもらうことができる。これは音声と文字で可能だ。まるで教員と個人レッスンをしているかのような感覚で、AI とインタラクティブに議論することができる。また、リスニング教材として利用したオーセンティックな会話や議論なども生成 AI は簡単に文字起こしをする。ディクテーションの解答の作成などもごく簡単だ。授業と関連するような話題をウェブ上から探し、それをリスニング教材として AI に書き直してもらう、またその解答と解説を作成してもらうということも可能だ。このようにして、ほぼ無限にリスニング教材とその解説を AI から提供してもらうことが可能だ。

(3) アクセントや他の音声要素の調節

言語習得には学習者がすでに理解しているレベルよりも少し難しい程度の言語に触れることが、言語習得に効果的である (Krashen, 1985)。だが、なかなかそのような条件に合う教材を探すことが難しい。そのような場合は、AI の会話機能や読み上げ機能を適切なレベルに設定することによって、瞬時に英語のレベルやアクセントを学習者に合わせて調整することが可能である。他にも、「単語や構文を簡単にしてほしい」や「CEFR の A1 レベルで話してほしい」「アクセントをオーストラリア英語にしてほしい」などと、より具体的な指示を与えることによって、学習者の好みとレベルにあった教材を提供できる。また、会話のスピードを「速め」に指定し、アシミレーションや脱落、弱音化、挿入など、様々な音韻的要素を変化させて英語の聞き取り練習をすることも可能だ。少し先のこともかもしれないが、音声を具体的に「フランスに住む 21 歳の大学生で、ユーモアあふれる知性豊かな男子」などと設定するとか、好みの映画俳優や歌手の声色で会話やリスニングを楽しむというようなことも可能になるかもしれない。このようなプロセスを通じて、多様な英語への意識を高め、その違いや面白さに気づいてもらうことも可能になる。

4.3 リーディングでの活動例

(1) リーディング教材の提供

上記のリスニングでの活用例で示したことは、リーディングではさらに簡単に可能となる。教材として必要なパッセージについて話題、長さ、語彙レベルなどを指示して AI に供給すれば、ごく簡単にリーディング材料を提供してもらえる。これに様々な形式で読解問題を追加してもらうことも可能だ。選択問題にすることも、要約問題にすることも、簡単な文で解答するような問題を作成してもらうこともできる。試験問題などでは学習者にとって無味乾燥な読み物が多い。そこで、彼らにとってごく身近な話題と適切なレベルで教材を提供してもらい、授業の活性化に役立てることができる。今まで、オリジナルな読解教材作成は、特

定の話題を探し、レベルを調整して書き換え、印刷して学習者に提供するといった難解で時間のかかる作業であったが、忙しい教員でも、学習者自身でも作成することができるようになったと言える。このように AI は教師や学習者にとってもこの上なくユーザーフレンドリーである。

（2）リーディング問題や英文法問題の解説

リーディング問題や文法問題で答え合わせする際、学習者は解答が間違っている理由がわからないということは意外と多い。しかし、ChatGPT を利用すれば、その解説をいとも簡単に提供してもらえる。しかも、図5のように、テキストを貼り付けて、説明を要求するだけだ。英語でも日本語でも解説してもらうことが可能だ。以下は、文中の“them”が何を指しているのか不明であったため、その解説を要求したものである。英語で解説したので、日本語での説明を求めると、AI はすぐに日本語に切り替えて説明した。

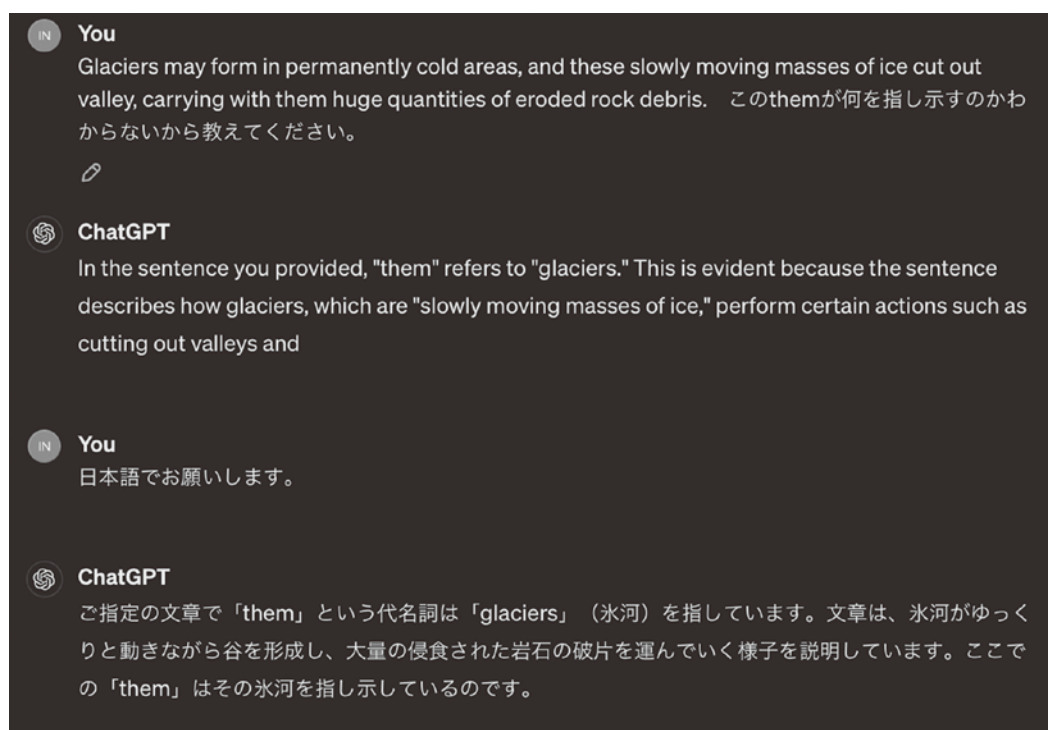


図5 themは何を指しているか日本語で説明を要求

また、携帯電話で該当する設問や選択肢の写真を撮り、それを ChatGPT に送るだけで同じことが可能だ。また、「私は選択肢 A が正解だと思ったが、なぜ違うのかわからない。教えてほしい」などと入力するだけで、詳細な解説を得ることができる。TOEFL 試験形式の

読解セクションの中にある文法問題に関して、ある大学院生が問題と選択肢の写真を AI に送ったところ図 6 のような説明が返ってきた。説明をよく読むと、まだよくわからないような部分もある。そこで、さらに ChatGPT と対話を継続して、納得するまでやり取りをしたところ、理解が深まり、記憶にも残ったということであった。

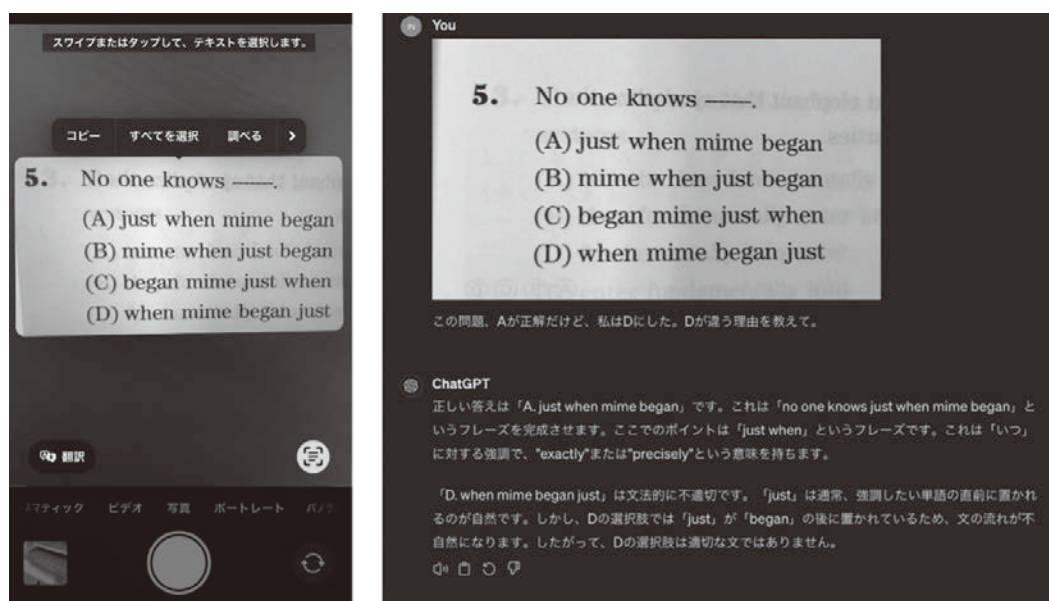


図 6 写真を撮って張り付けて説明を要求

(3) 即時的、恒常的なサポート

英文を読む際に単語や文の構造が理解できないため、意味がとれないということが多い。その場合、ChatGPT などに「この文の意味や構文がわからない」と伝えることで、文全体の意味に加え、節や句ごとに分解し、さらに品詞や構文の詳細な説明までしてもらえる。これまで不明な箇所を後回しにしていた学習者でも、生成 AI を活用することで、その場で即時的に理解を深め、問題解決が可能になる。それが「読めた」という達成感や自己効力感を与え、動機づけを維持することに繋がるかもしれない。生成 AI を常にかいた状態にしておけば、24 時間恒常的なサポートを得られることになる。

ただ、気をつけなければいけないことは、即時的に問題を解決してしまうことで、学習者は理解したような気分になってはいるが、実はリーディング力の向上には繋がっていないということはある。その場で、あまりに簡単に物事を解決すると、深い思考が介在しないことが多い。これが逆に学びを妨げることがないよう留意したい。

4.4 ライティング活動例

(1) 即座で親切なフィードバックを利用

多くの学習者はライティング学習を後回しにしがちだ。その理由は、自分が書いた英文をチェックする手段がなく、書くこと自体が無意味だと感じるのが要因ではないだろうか。また、忙しい教員に質問することをためらい、教員自身もライティングについては不安な部分を抱えることがある。だが、AIはその作業を気軽に引き受けてくれる。例えば、TOEFL iBT® や英検のライティング問題を解いた後、ChatGPT に送ることで簡単に添削を受けるこ

IN

You

以下はTOEFL iBTのWritingのために私が書いた文章です。トピックは「Do you agree or disagree with the following statement? Only people who earn a lot of money are successful.」です。私の書いた文章を添削してください。変更した部分はなぜ変えたかの理由を逐一書いてください。

Success, per se, means things that can get over something it aims to with an effort whether in easy situations or not. Admitting that there is the other side of the coin of advantages and disadvantages to this question statement, depending on the mindsets, circumstances, and perspectives from each person, the answer varies from person to person. All in all, I agree with the assertion for two points.

First and foremost, I reckon that success that many people imagine involves property, i.e., a person who has high amounts of money is seemed to be a successful person. I believe that how people around you see you is very essential in that I decide the meaning of success, e.g., if I think I

ChatGPT

Your TOEFL writing sample on the topic of whether only people who earn a lot of money are successful presents some thoughtful points. However, there are areas where clarity and grammatical accuracy can be improved. Here's a revised version of your essay with explanations for the changes:

Original Sentence:

Success, per se, means things that can get over something it aims to with an effort whether in easy situations or not.

Revised Sentence:

Success, by definition, involves overcoming obstacles to achieve one's goals, regardless of the difficulty of the circumstances.

Reason for Change:

The original sentence was somewhat unclear and awkwardly phrased. The revision clarifies the meaning by simplifying the structure and using more precise language.

図 7 素早い添削と解説の例

とが可能だ。修正された箇所については、「変更の理由」や「修正の詳細」を説明してもらうことができるため、どこが不適切であるか、なぜそうなのかを知ることができる。また、回答に対して追加の質問をし、さらに深掘りした議論を行うことも可能だ。このような即時性のあるフィードバックは、「不安だがとりあえず書いてみる」という積極的な姿勢を促してくれる。

図7は TOEFL iBT® の練習のためにある大学院生が書いたものであるが、それに対して、添削と説明を ChatGPT にお願いしている。後半は AI からの添削とその説明である。この後日本語で説明を要求することもできる。添削や説明をお願いすることに申し訳なさを感じないというのは、生成 AI の利用ならではの。

(2) AI とチャットでライティングを日常の習慣にする

AI との英文での文字チャットは、LINE や Instagram のダイレクトメールなどで英語話者とチャットしている感覚に近い。大きく違うのは、鬱陶しい人間関係（英語が稚拙過ぎて恥ずかしい、緊張する、失礼な英語は書けない、教養がないと思われたらどうしよう、心が見透かされているのではないかなど）を考えながら、英語を書く必要がないということだ。AI との文章のやり取りは、このような英語を書くことに纏わる心理的障壁を取り払ってくれる。有料オンライン英会話のように、予約や大きな出費も必要ない。しかも、初級話者の場合は、往々にして、オンライン英会話ではほとんど先生が話して、学習者は相槌だけ打ち、セッションが終わるといようなことも少なくない。例えば、ある学生は課題のオンライン英会話が苦痛だという理由で、筆者の一人に相談に来た。話を聞いてみると、先生の言っていることがほとんどわからず、何度も Pardon me? というのは気が引けるといふ。さらに、あまりにもその学生の英語が貧弱なので、そのオンライン英会話の先生が、音声をミュート状態にして、臨席の他の教員と会話をしていたという。笑われたり、無視されたりしているようで辛い経験であったとうったえた。

AI ではそのような辛い経験はありえない。表現の稚拙さや文法の間違いなどは、「間違っていたら随時直してください」と一言前置きするだけで、隣にもう一人の英語上級話者がいるかのように足場掛けをしてくれる。書き終わった後に、「もう少し自然な文章にしてください」「表現の豊かさや複雑さを上げて書き直してください」などと指示すれば、すぐに別のレベルの文章を提案してくれる。このような一連の助けがあれば、英文を書くという作業が全く「不安」で「おっくう」ではなくなる。AI と英文チャットで文章のやり取りをすることが、日記を書いているかのような「楽しい」日常の一部となる可能性もある。

図8はマルタ島に留学したある学生がその思い出話を ChatGPT とチャットしているものである。まずこの学生が「マルタ島が素晴らしかった、特に Valletta という町が気に入った」と英語で書くと、それに対して ChatGPT が、「いい時間を過ごしたようですね。バレッタのどこが気に入ったのですか」と、会話を広げようとする。これは会話上手な人間のコミュニ

ケーションストラテジーと同じだ。その後、学生が Valleta を Paleta と綴ると、ChatGPT が誤りを随時指摘している。ここで注目すべきは、最後の ChatGPT の発言である。ChatGPT は “But your description of the architecture and local cuisine sounds fantastic! What else did you enjoy about your time in Malta?” と、まるでベテランの教員のように、ポジティブフィードバックや会話を広げることを忘れていない。着任早々の新任教員より教え方が上手かもしれない。他にも、途中で日本語へのコードスイッチングがあるが、何事もなかったように会話が続いていることにも注目したい。このような何気ないやり取りなら、英語話者と SNS でチャットしている感覚に近く、空き時間や就寝前に毎日でも英文ライティングに勤しむことが可能だろう。

国際英語論の発想を基にしたライティングでは、ネイティブのように書くのではなく、「自分らしい英語 (My English)」で通じることを最も重要視しながら書くことが、多量のライティング活動に繋がり、ひいては英文のライティング力が上がるという立場をとる。通じれば自



図8 精神的ハードルの低い AI との日常会話の例（マルタ島の思い出）

由に書いていいのだ、という発想が、AI とのライティング活動を気楽な日常学習の一部に変え、ライティングの向上を後押しする。

(3) 構成力やフォーマリティー、スタイルの向上

ChatGPT は、単なる表現や文レベルの添削にとどまらず、構成や論理展開の適切さまで指摘してくれる。自分が書いた英文を論理的に整理したい、三段論法を使って書き直したい、あるいは一定のテンプレートに沿った形で書き直したい場合など、談話レベルでの確認・修正・提案の依頼も可能だ。「日記調の主語を省略する文章にしてほしい」「アカデミックスタイルで書き直してほしい」「教養ある知的な大人の文章にしたい」などと依頼すれば、完全にスタイルの異なった文章を提案してもらえる。このようにフォーマリティーや談話レベルで修正や提案を要求できる。提案された文章に納得しない場合は、何度も AI と議論しながら、詳しい説明を要求し、さらに文章を書き直すことが可能だ。しかも、延々と無料でこの作業を繰り返すことが可能だ。

国際英語論の観点から言えば、欧米的な論理展開ではない英文の構成がどの程度汎用性があるのかなどを確認することもできよう。あえて日本語の典型的な文章構成スタイルである「起承転結」で文章の構成を組み立て直してもらおうというのも面白い。教室内では、その 2 つを比較して学習者らと議論することもできよう。

まとめ

生成 AI は様々な英語を授業や個人学習に取り入れるツールを提供する。また、世界の諸言語に触れること以外に、個人や集団のニーズへの適応性の高さを活かし、「有意味性」や「関連性」の高い言語活動を多量に提供してくれる。しかも、生成 AI は人間ではないので、緊張や不安で会話が進まないという日本人学習者の致命的な欠点を補ってくれる。これは誤りを恐れず「自分らしい英語 (My English)」を使うことを奨励する国際英語論の考えと軌を一にするものであり、両者を組み合わせれば、大きな相乗効果が期待できる。

課題もある。まず、AI ツールを教室に効果的に組み込む方法に関して教員は知識面、技術面で十分な能力を身につけている必要がある。また気をつけないと、学習者は AI を利用し課題などに従事しているが、実は全く英語力自体は身につけていないということもありえる。最終結果よりその学習過程に認知や情意レベルの成長があり、それこそが本来の「教育」であり「学び」であるということを教育者は忘れてはならないだろう。また、学習者が受け身になり過ぎないように注意することも重要だ。AI の補助的役割を活かしながら、学習者自身の英語力や発想力を常に養う姿勢が求められる。ChatGPT の回答を批判的に活用し、必要に応じて学習者の知恵と知識で補完することで、より信頼性の高い結果を得ることがで

きよう。繰り返すが、学習者自身が主体であり、生成 AI はあくまで学習者の言語学習を手助けする補助手段であるという姿勢を忘れてはならない。

また、生成 AI はまだ教師が提供するような共感的な指導と包括的なサポートを完全に置き換えることができるまで至っていないことも留意事項の一つであろう。学習者の複雑な認知的および感情的発達を促進する教師の役割は非常に重要で、かけがえのないものだ。教員は効果的であるだけでなく、公平で包括的、かつ文化的に配慮した生成 AI の利用を常に促す必要がある。その意味でどれほど生成 AI が発達しようとも、学習者の成長を見守り、効率的な AI 利用とその応用を促す教員の存在は不可欠だ。

さらに、生成 AI は現在存在する情報を基にしているので、すでに世の中に存在する不平等や権力の不均衡を反映し、永続させる可能性もあることも押さえておきたい。巨大言語と権力や経済は必然的に関連性が高い。言語の発展と進化は権力構造によって形作られ、それを AI が後押しする可能性があることも念頭において付き合わなければならない。生成 AI が発展し続けると、世界共通語として「AI 英語」が標準だと主張する人や AI が登場することもありえる。ひいては、AI の英語が様々な文化や地域での英語使用、その学習方法にまで影響を与える可能性もある。これは、英語の多様性の尊重が「自分らしい英語 (My English)」の認知と英語力の向上に繋がると考える国際英語論にとっては、全く受け入れられない発想である。

吉川ら (2024) が言うように、生成 AI が英語の多様性を受け入れつつも、結局は母語話者英語をデフォルトとしている以上、世界の英語学習者が「自分らしい英語 (My English)」の表出に近づくためには、学習者側の注意や工夫が不可欠となる。工夫のない学習者は、AI からの最初の回答で満足してしまい母語話者英語偏重からの脱却ができないままとなる。自分の感性を反映しうる英語表現に至るまでに、AI との多面的な「交渉」を繰り返し、AI を賢く使用することが求められているのだ。AI の真の活用は使用者自身が国際英語論の重要性を的確に理解しているかどうかにかかると言えよう。

とは言うものの、AI は教員に近い（ある部分ではそれを超える）身近な学習支援者となることは確実であり、その利用方法によっては、学習者の言語習得を飛躍的に効率化する可能性がある。そして、ChatGPT に代表される生成 AI を身近な学習支援者とすれば、誰もが高いレベルの「自律的学習者」となれる可能性がある。これからの教員の大きな役割の一つは人間的な英知と共感的対応で、学習者と AI との付き合い方を上手に導いていくことになることは間違いないだろう。

ただ、この言語使用の場の提供や言語活動中心の授業を、生成 AI を利用して展開していくには、「自分らしい英語 (My English)」が（「で」ではない点に注意）良い、というより、それが非母語話者にとって目指すべき理想である（日野, 2008）、という発想がない限り、学習者も教育者も母語話者の英語に縛られることから解放されない。いつまでも母語話者に近い英語の使い方や発音を求める限り、生成 AI 利用で提供される言語活動を十分に活かし

きれない。その意味で今後も汎用性を重視し、「自分らしい英語 (My English)」の確立を目標とする国際英語論的な発想は、AI 時代の英語学習・教育においても非常に重要な役割を果たすことは間違いない。

注

- (1) 第 1 節は塩澤 (2024-b)「生成 AI と『国際英語論』—英語教員や英語教育は不要になるのか」『Glocal』44 に掲載したものを、大幅に加筆、修正したものである。
- (2) 第 4 節の一部は 2024 年「中部大学英語教育セミナー」で筆者らが口頭発表したものである。

参考文献

<英文>

- Ausubel, D. (1968). *Educational Psychology: A Cognitive View*. New York: Holt, Rinehart & Winston.
- Anderson, J. R. (1992). Automaticity and the ACT theory. *American Journal of Psychology*, 105(2), 165–180. DOI: <https://doi.org/10.2307/1423026>
- Crystal, D. (1990). *The English Language*. London: Penguin.
- Crystal, D. (1997). *English as a Global Language*. London: Penguin.
- García, O and Li, W. (2014). *Translanguaging: Language, Bilingualism and Education*. New York: Palgrave.
- Gass, S. (1997). *Input, Interaction, and the Second Language Learner*. Mahwah: Laurence Erlbaum Associates.
- Kachru, B. (1976). Models of English for the Third World: White Man's Linguistic Burden or Language Pragmatics? *TESOL Quarterly*, 10(2), 221–239.
- Kachru, B.(ed.) (1982). *The Other Tongue: English Across Cultures*. Urbana: University of Illinois Press.
- Krashen, S. (1985). *The Input Hypothesis: Issues and Implications*. New York: Longman.
- Krzic, G. (2024). Conversation with one of the authors (Aug. 17, 2024)
- Lantolf, J. (2010). Second language learning as a mediated process. *Language Teaching*, 33(2), 79–96. DOI: <https://doi.org/10.1017/S0261444800015329>
- Long, M. (1996). The Role of the Linguistic Environment in Second Language Acquisition. In William Ritchie & Tej Bhatia (eds.) *Handbook of Second Language Aquisition* (pp.413–468). Cambridge: Academic Press.
- Pica, T. (1994). Research on Negotiation: What Does It Reveal About Second-Language Learning Conditions, Processes, and Outcomes? *Language Learning*, 44(3), 493–527.
- Reeve, J. (2018). *Understanding Motivation and Emotion* (7th edition). Hoboken, NJ: John Wiley & Sons, Inc.
- Selinker, L. (1972). Interlanguage. *IRAL-International Review of Applied Linguistics in Language Teaching*, 10(1–4), 209–232.
- Schmidt, R. (1990). The role of consciousness in second language learning. *Applied Linguistics*, 11, 17–46. DOI: <http://dx.doi.org/10.1093/applin/11.2.129>.
- Smith, L. (1976). English as an International Auxiliary Language. *RELC Journal*, 7(2), 38–53.

- Smith, L. (1987). *Discourse across Cultures: Strategies in World Englishes (English in International Context)*. New York: Prentice Hall.
- Swain, M. (1985). Communicative Competence: Some Roles of Comprehensible Input and Comprehensible Output in its Development. In Susan M. Gass, & Carolyn G. Madden (eds.), *Input in Second Language Acquisition* (pp.235-256). New York: Newbury House.
- Swain, M. (1993). The Output Hypothesis: Just Speaking and Writing Aren't Enough. *Canadian Modern Language Review*, 50(1), pp.158-164.
- Swain, M. & Lapkin, S. (1995). Problems in Output and the Cognitive Processes that Generate a Step towards Second Language Learning. *Applied Linguistics*, 16, 371-391.

<邦文>

- 大木充 (2011) 『『ヨーロッパ言語共通参照枠』(CEFR) に学ぶ外国語学習の意義』『マルチ言語宣言』大木充・西山教行 (編) 京都大学学術出版会.
- 大下浩之 (2024) 筆者とのメールのやり取り. 2024 年 8 月 22 日
- 金丸敏幸 (2024) 「言語生成 AI は外国語教育に何をもたらすか?」『私立大学情報教育協会ジャーナル』183(2), 16-17. https://www.juce.jp/LINK/journal/2401/02_05.html
- 小宮富子 (2007) 「日本人英語における定冠詞の特徴と安定化について」『アジア英語研究』9, 7-24.
- 塩澤正 (2014) 「『国際英語論』の視点にたった英語教育とは一具体的目標と留意点」塩澤正・榎木蘭鉄也・倉橋洋子・小宮富子・下内充 (編) 『現代社会と英語—英語の多様性を見つめて』金星堂, pp.163-174.
- 塩澤正 (2020) 「『国際英語論』からの日本の英語教育への示唆—Model of “My English” からの提案—」『アジア英語学会紀要』22, 13-56.
- 塩澤正 (2024-a) 『留学・国際交流が人生に与える影響』風媒社.
- 塩澤正 (2024-b) 「生成 AI と『国際英語論』—英語教員や英語教育は不要になるのか?」『Glocal』44, ページ不明, 印刷中.
- 塩澤正・吉川寛・倉橋洋子・小宮富子・下内充 (2016) 『国際英語論で変わる日本の英語教育』(共編著) くろしお出版.
- 杉山侑姫・塩澤正 (2024) 「What my Students are Doing with AI Communication Tools」英語教育セミナーでの口頭発表, 中部大学.
- 鈴木孝夫 (2011) 『あなたは英語で戦えますか—国際英語とは自分英語である』富山房インターナショナル.
- 染谷藤重 (2022) 「教師の動機づけスタイルがエンゲージメントに及ぼす影響—英語の授業における心理的欲求を媒介として—」『中部地区英語教育学会紀要』51, 33-40.
- 田中茂範 (2016) 『英語を使いこなすための実践的学習法—my English のすすめ』大修館書店.
- 塚原信行 (2011) 「スペイン語—多言語状況から考える異言語学習」大木充・西山教行 (編) 『マルチ言語宣言—なぜ英語以外の外国語を学ぶのか?』(pp.81-102) 京都大学学術出版会.
- 東條加寿子 (2011) 「CEFR と日本の英語教育: 一考」『2010 年度大阪女学院大学教職課程機関誌 OJC 教職活動報告・研究』1, 70-74.
- 日野信行 (2008) 「国際英語」小寺茂明・吉田晴世 (編) 『スペシャリストによる英語教育の理論と応用』(pp.15-32) 松拍社.
- 柴田美紀 (2020) 『英語教育のための国際英語論—英語の多様性と国際共通語の視点から』大修館書店.
- 本名信行 (2002) 『アジア英語辞典』三省堂.

- 本名信行 (2013) 『国際英語としての英語—文化を超えた伝え合い』 富山房インターナショナル.
- 村野井仁 (2017) 『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』 大修館書店.
- 吉川寛 (2017) 『英語学と英語教育の接点』 中京大学文化科学研究所.
- 吉川寛・倉橋洋子・小宮富士・下内充 (2024) 「AI 時代の英語教育と国際英語論」 大学英語教育学 (JACET) 第 63 回国際大会口頭発表 愛知大学.

<ウェブページ>

- Council of Europe, Modern Languages Division, Strasbourg ([1996, 1998, 2001], 2018) Common European Framework of Reference for Languages: Learning, Teaching Assessment. (Companion Volume with New Descriptors) <https://rm.coe.int/cefr-companion-volume-with-new-descriptors-2018/1680787989>
- 坂本将磨 (2024) 「ChatGPT が嘘をつくのはなぜ？」 AI 総合研究所 <https://www.ai-souken.com/article/truth-about-chatgpt-lies>
- 藤崎麻里 (2024) 「AI は英語教育を変えるのか『使わないで』より『どう使うのか』で強力なツールに」『The 朝日新聞 Globe』 <https://globe.asahi.com/article/14977180>
- 文部科学省 (2016) 「高等学校における英語教育の改善について (参考資料)」 https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/058/siryo/_icsFiles/afieldfile/2016/01/15/1366027_8.pdf
- 文部科学省 (2018) 『高等学校学習指導要領解説 外国語編・英語編』 http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2018/07/13/1407073_09.pdf